
恋はいつも嵐のように

銚之塚瑞希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋はいつも嵐のように

【Nコード】

N7631G

【作者名】

銛之塚瑞希

【あらすじ】

そう…恋と云うものはいつも嵐のようにやって来る。あのとき、そう君と初めて出会ったときも心の中に嵐のようなものを感じていたんだ――

第一章

…そう。

恋と云うものはいつも
嵐のようにやって来る。

あのとき、そう、君と初めてあったときも心の中に嵐のようなもの
を感じていたんだ——

一話

俺は在原巫兔。

今年私立星鈴学園高等部に編入した。

ここはエスカレーター式で、幼稚園から大学まで繋がっている。外部入学生は珍しいらしい。

なんでそんなところに俺が入学したかというところ…

「あんだ、ここ受けなさいよ。」

「は？そこつてエスカレーターじゃん。やだよそんなところを受けなさい？」…はい。」

とまあほとんど脅されて選んだわけだ。ま、他に行きたいところもなかったし、別にいいんだけど。

べ、べつに俺が頭が悪い訳じゃないからな！
ま、所詮高校だし、どこでもいいと思ったただけだ。

そんなことより…

ここ、どこだ？

この学校広すぎんだよ！つたく、理事長室行かなきゃならんのに…

つたく金の無駄遣いだ！

ブツブツ…

「もしもし？」

「ブツブツ…」

「そこのおちびさん？」

「だあれがちびじゃゴルウウアア！」

「…やつと気づきましたか。」

「ん？あんただれ？」

「ん？私ですか？私はここの生徒会高等部副部長の成宮斎です。」

「へえ、イツキか。」

「はい。（漢字分かっていませんね…）貴方こそお名前は？」

「俺？俺は在原巫兎だ。」

「巫兎さんですか。この学園の人ではないですよね？」

「うん。転入してきた。」

「そうですか、ではあなたが噂の転入生なんですね。」

「噂かどうかは知らないけど新しく転入してきた。」

「わかりました。ところでこんなところで何をやっているんですか？」

「それがよう…迷っちゃって…」

「そうですか…わかりました。私が案内しましょう。理事長室でよろしいですね？」

「おう！頼む。」

「では参りましょう。」

やった♪

副カイチヨーさんがつれてってくれるって！

いいやつだなあ…

副カイチヨーさんがこんなにいいやつなんだからカイチヨーはもつといいやつなんだろうなあ…

「つきましたよ。」

「えっあつおう。サンキュ。」

「いえ。では私はこれで。」

「ありがとう。」

「いいやつだなあ
ほんとに。」

「てか扉がやたらにでかい…
よ、よし！入るぞ！」

「俺は扉を開けた。」

二話

そつ、開けたんだ。そしたら――

バン！

「みこちゃーん！ん！」

な、なんか抱きついてきやがった！？

「モガ…フガ…だ、だれ…？」

「僕だよ。覚えてないの？」

「と、取り敢えず離せ。」

ブツブツいいながらもそいつは俺を離れた。

「まず、お前は誰だ。」

「ほんとに覚えてないんだね…」

「ん？」

「いや。僕は柊康人。ここの理事長だよ。」

「は？理事……ΣΣええっ」

「ここ何処だと思ってきたの？」

「あ、そうか。ここ理事長室だった。」

「…相変わらずお惚けさんだなあ。」

「…さつきから俺を知ったようなことを言っけど、初対面だよな？」

「僕の名字を思い出して？」

「…？…柊…柊…そういえば母さんの前の名字も柊だったような…」

「だって僕、ミコちゃ

「その呼び方やめろ。」…巫兔のお母さん、兎乙子姉さんの弟だもん。」

「…はあああああああああ！？…そ、そんなこと聞いてないぞ！」

「昔会ったことあるけど、すごい小さいときだったからね。覚えてないのも無理ないよ。」

「そうか…だから母さんはここに入れたかったのか。」

「そうみたい。（姉さんの趣味もあると思っけどね）」

「で、俺のクラスは何処だ？」

「うん。1-Dクラスだよ。あと寮は…」

「ち、ちよつとまで、俺は家が近いから寮には入らないはずじゃ…」

「うちの学校は全寮制だよ？それと、巫兔は編入試験三位だったから二人部屋ね。」

「そんなこと、母さんは一言も…（元々何も言われてないけど。）」

「姉さんらしいや。あつあと部屋は櫂の間ね。」

「旅館かよっ」

「ふふ。これは僕の趣味だから。」

「悪しゅm」

「何か言った？（黒笑）」い、いえ。」

「じゃ、そうゆうことだから。この後職員室によって柏木先生に案内してもらって。その人が担任だから。」

「分かった。柏木先生だな。」

「うん。たまにはここにも遊びに来てね。」

「誰が来るか！」

「あ、そうだ。あとこれとこれ着けて。」

「ん？かつらと眼鏡？」

「うん、巫兔の容姿は目立つからそのままだと直ぐに犯られるよ。」

「や、殺られる！？わ、分かった。着ける。」

「何か漢字違うけど…ま、いっか。じゃ、がんばって。」

「おう！」

「ふふ。（姉さん…気持ちは分かるけどいくらなんでも危ないよ。

巫兔の容姿じゃあ直ぐにバレて目を付けられるだろうから。…でも安心して。僕が命に代えても守るからね。」

二話（後書き）

初めまして。後書き初です。
子ですwだからですね。

あ、ちなみに巫鬼のお母さんは腐女

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7631g/>

恋はいつも嵐のように

2010年12月22日14時41分発行